

図書紹介

門脇厚司著

『社会力を育てる—新しい「学び」の構想』

稲永由紀*

本書は、著者の長年にわたる学術研究成果に基づき、1999年に出された『子どもの社会力』(岩波新書)の続編として書き下ろされたものである。

改めて申し上げるまでもなく、著者は長年筑波大学教育学系に奉職してこられ、本学会の初代会長をお務めになられた方である。ただし、紹介者は時期的に著者とはほぼ入れ違いで筑波大学に縁をもつことになったので、著者は日本教育社会学会の元会長であり、紹介者の大学院時代の研究領域であった社会化研究において、常に先端を切り開いてこられた先達である、と紹介させていただければと思う。現在、紹介者は高等教育研究を生業にしており、子どもの社会化研究から離れて10年は経つ。それでも失礼を承知で本書の紹介依頼をお引き受けしたのは、規範形成研究をテーマにしていた大学院生当時、学会での研究発表に対するコメントや著作から多くの影響を受けていたからである。

社会力

本書の構成を紹介する前に、本書のキーワードである「社会力」という概念について少し触れておくことにしたい。簡潔に紹介すれば、社会力とは「人間が社会を形成し維持していくのに不可欠な資質能力」(はじめに、v頁)、端的には「人と人がつながり、社会をつくる力」(第2章、65頁)であるという。

著者はこの社会力という言葉に social competence という訳語を当てているが(序章、11頁)、この competence という訳語に、著者の想いが凝縮されているように思う。competence は能力と訳されることもあるが、単に獲得した知識やスキルを示す概念ではない。獲得した知識やスキルを利用しながら実際に何かを遂行することができるという側面を強調した、能力概念である。これこそ、単純に社会の価値を内面化することによって社会に適応するという受動的な「社会性

*筑波大学大学研究センター

sociability」(第2章, 69頁)とは異なり, 自ら社会と関係を取り結んで社会を形成し維持していくという能動的な側面を強調した, 社会力概念の含意であると理解できる。おそらく, 社会との関わりに関する知識やスキルにしても, それらが社会との関係を構築するためのツールとしてこれまでに当該社会の中に蓄積されてきたものであることを実感し得ない限り, 定着はむずかしい。

そして社会力は, 先天的なものではなく後天的に獲得されるものであり, その育成には, 多様な他者と多く関係を取り結び相互行為を重ねていくことが重要である(はじめに, vii頁)。だが, 「子どもの社会化にとってもっとも重要な, 他者との直接的な交流, とりわけ大人との関わりが極端に少なくなったという変化」(序章, 7-8頁)から考える限り, 相互行為のための機会を意図的に大人が用意しなければ社会力の育成は不完全になるとして, 著者は, 本書全体を通じて警鐘を鳴らす。

本書の構成

本書の構成は, 以下の通りである。

序章 なぜ, 若い世代の「社会化不全」が進むのか

第1章 教育と子どもの現状をどう見るか

1 変容する成育環境 / 2 「非社会化」という特質

第2章 なぜ, いま社会力なのか

1 戦後教育60年の転変 / 2 学力向上に偏した教育の問題 / 3 40年前から進んでいた学力の階層格差 / 4 見逃せないもう一つの教育問題 / 5 互恵的共同社会を可能にする社会力

第3章 社会生活を営む能力としての社会力

1 社会生活を営むということ / 2 ヒトの子が備えている高度な能力 / 3 後天的に形成される人間の社会的能力 / 4 社会的知性の核としての社会力

第4章 急を要する教育目標の転換

1 戦後新教育が目指した「新しい学力」 / 2 OECDの学力観に学ぶ / 3 よき社会人を育てる能力 / 4 公教育の目標を転換する

第5章 社会力をどう育てるか

1 社会力が学力を高める / 2 多様な他者との交流が育てる社会力 / 3 地域

社会を新しい親密圏に

終章 互恵的共同社会の実現に向けて

1 実現するための困難な道のり／2 互恵的共同社会を実現する教育

本書は『子どもの社会力』の続編ではあるが、本書においても著者は、まず、社会力概念の説明やその必要性について、教育社会学はもちろんのこと、発達心理学や脳科学の学術研究成果をふんだんに使いながら、本書の半分以上の章を割いてわかりやすく描いている（序章～第3章）。一部を内容的に『子どもの社会力』と重複させることで、同書を読んでいない読者に対する配慮がなされている。

次に、一見これら社会力の育成は戦後教育の中で置き去りにされていたと見えるが、実はそれが理想と現実が乖離する形で進行した結果であることを明らかにした上で、OECD/PISA やイギリスの事例を引き合いに出しながら、我が国の公教育政策目標を「産業社会の担い手」の育成から「個人の善き生と社会の健全な発展を可能にする教育」へと転換するべきであると主張する（第4章）。

これらに引き続いて、自然に育つものではなく「育てようとして育てなければ育たないもの（はじめに、viii頁）」である社会力育成の、数々の実践記録が残されている。この章が存在することによって、読者は、単に頭だけで社会力育成を理解するのではなく、具体的な取組に関するイメージまで得ることができるようになっていく（第5章）。

そして終章では、利己的な社会あるいは「格差社会」への危機感と、著者の理想とする「互恵的協働社会」への困難が描かれている。特にこの終章は、社会学の根本問題「社会秩序は如何にして可能か」（いわゆるホップズ問題）に対する著者の回答であり、同時に、学歴・階層研究が、格差社会の進行に対して、その再生産以上の思い切った知見を提出することができないことに対して一石を投じているようにも、紹介者には読めた。著者は、社会関係資本 social capital のもととなっているのが社会力である（第2章）、と主張している一方、この概念を導入することによって、実は、乗り越えられない格差と縮めることのできる格差を峻別することができる。そして、後者の鍵となるものがまさに社会力となれば、そこに、再生産論を乗り越えるためのブレークスルーが見える。

全世代にひろがる社会力育成問題：例えば高等教育から考える

本書を読み進めてみると、これが単なる子どもの社会化論を越えていることはすぐに理解できる。例えば、紹介者自身の現在の生業に引き寄せてみると、高等教育の現場においてもこうした社会力の問題は重要な 이슈になっている。日本の高等教育では「エンプロヤビリティ育成」や「キャリア教育」の名目で、ビジネスマナーや礼儀・作法と呼ばれる具体的な行為様式を教えたり、「コミュニケーション能力」という言葉でその教育の重要性が強調されたりしている。著者もまた、筑波学院大学の学長としてこうした取組を積極的に進めてこられた。その実践は本書（第5章）にも詳述されているので、読者も現在の大学教育の現場をリアルに感じ取ることができよう。ただし、紹介者の勝手な想像をお許しただけならば、「社会力は生まれた直後から育てるのがもっとも効果的ではあるが、教育する対象が大学生であっても、…(略)…社会力を育てる教育の効果はまだ十分期待できる」(第5章, 195頁) といえ、大学を含めた高等教育段階でこうした取組を進めていかざるを得ない状況自体に対して、著者自身はある種の憂慮を感じておられたのではないかと推測する。

地域の人々など他者と関係を持つ時に問題にされるのが、例えば、マナーや礼儀といった行為様式がきちんと身につけていない、ということである。これら行為様式は、他者と対峙するときの敬意の示し方である。しかし、先述したように、そうした行為様式の必要性を理解するためには、他者と関係性を取り結ぼうとする経験がないと難しい。経験の蓄積がないままに行為様式だけ訓練したところで、一旦、異なる文化・社会を背景とする者と対峙・共存する場面になれば、どうやっていいかわからなくなる。問題の根本は、具体的な行為様式を体得していないことにあるのではなく、行為様式を構成する原理——これが著者の言う社会力につながる——の理解・体得がなかなか進んでいないことにあり、そうなると本来的には、「高等」教育では主にカバーすべきことではなく、「初等」教育あるいはその前の段階から脈々と培われなければならない話になるからだ。

加えて、高等教育でのコミュニケーション能力育成は、本来、専門やその延長上で想定される就職先との関係に基づいた育成を必要とするはずである。特に卒業後の職業生活と関わって語られる場合には、想定される進路、業種、職種によって、関係を取り結ぶべき他者は全く同じではなく、これを一般化して論じることはおよそ不可能に近い（が、現在の大学教育をめぐる議論は得てしてこの種の

ものが多い)。しかし、高等教育に進むまでに十分に獲得できなかった社会力という忘れ物を取りにいくことを中核に置かざるを得ない現場は、枚挙にいとまがない。もっともその根底には、保護者の社会力や、彼女ら／彼らを受け入れる「先輩」たちの社会力を問う状況もある。社会力育成をめぐる問題はおそらく、若年者に限らずその親の世代にも（おそらく私自身にも）広く突きつけられた問題である。

本書の意義

紹介文にしては相当に脱線をしてしまったが、本書の最大の意義は、まず、この学術成果が一般書として出されたことにあると感じる。教育学を学んだ者であれば、オオカミに育てられた少女の話の一度は耳にする。教育社会学に触れた者であれば、生物学的な「ヒト」が社会的な「人間」になる過程（社会化過程）において、多様な他者と多く関係を取り結ぶことが自我形成に如何に重要であるかについて学んでいる。そういう者にとって、社会力概念は非常に理解しやすいし納得がいく。社会力の根底にある考え方は社会化論そのものなのだ。本書は「関連諸科学の研究成果や理論を踏まえ、多くの事例や事実を紹介しながら、できるだけ具体的に、わかりやすく書こうとした」（はじめに、iv頁）ものであり、経験則を元に展開されている市井の教育論とは異なる。だから、一般の読者にとっても、教育に携わる者であっても、改めて他者との関係性構築が人間形成に与える影響の大きさを認識させられることになる。おそらく、子どもどころか、自身に社会力があるのかどうかを考えさせられた読者も多いだろう。学術成果を社会に還元するブリッジとして、見事に成功している。

それだけではない。本書は、初学者むけの社会化論のテキストを超え、相互行為のようなミクロなテーマから社会システムのようなマクロなテーマまで、テーマが細分化しすぎてある種のまとまりがなくなりつつあった教育社会学という領域を見渡せる、いわば見取り図をクリヤに描きだすことにも成功している。それはまさに、著者がこれまでの研究生活の中で考えておられたことについて綴られてある「門脇教育社会学」そのものであり、私のようなすでに教育社会学領域で研究を続けている者にとっても、先達の思想への理解を助ける書になっているといえよう。

当を得ない紹介文になっていたとすれば、これはひとえに、子どもの社会化論から10年以上離れていたことと、著者のような文才には恵まれない紹介者に責めがある。少しでも当時のご恩をお返しすることはできただろうか。

門脇厚司著『社会力を育てる—新しい「学び」の構想』

岩波新書，2010年，800円（税別）